

あゆみ通信

VOL. 147

あゆみの会(真宗大谷派
大阪教区第2組同朋の
会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

安心して人事を尽くす



真城義磨先生

「雑行を棄てて本願に帰す」と聞くと、雑行を全面的に否定すると思うように思われるかもしれませんが、そう言うことではありません。明治時代を生きられた清沢満之先生が、若者に向かって他力回向について話をされた中で、その当時福沢諭吉がよく使っていた言葉である「人事を尽くして天命を待つ」という言葉を引き合いに出して、他力回向というのは、他人任せから一番遠いことであり、「天命に安んじて人事を尽くす」ことであると言われました。「天命に安んじて」というのは、本願力に安心してということです。この私が仏さまから無条件に肯定されている。そして、そこに安心して人事を尽くしていく。私のできることを惜しまずやらせていただくということです。早く助けてくださいと言って、お客様のようになっているということではないということです。安心して人事を尽くすことができますようになるということです。大きな安心感をベースにする。どの人にも存在価値・存在意義があり、そういう者同士が生きているというところに立ったところで、私たちは一人残らず、限りあるいのちを生きていけるわけです。

ところが、私たちはこの近代的な歩みの中で、こういうことを全く忘れてしまって、目の前の雑行(機能と成果)の世界で本当に一生懸命なのです。自分の弱みを見せられない、自分がいい人材だと人に

認めてもらわなければ生きていけない、そんな大変な時代を作ってしまったんです。

他人に安心できずに、一生懸命お金をためて一人で生きていく、無縁社会、無縁死という世界で苦しんでいる。

そうではないのです。あなたはあなたのままで丸ごと尊いのだという、何も付け加えなくても尊いのだと言われる本願の世界に出遇うと、それまでの歩みがいかに真剣なものであっても、雑行でしかなかったと気づかされて、あらためて出遇うご縁を引き受け精一杯生きていく道が開かれてくるでしょう。

(真城義磨「真宗の生活」2014年版より)

第2組聞法会 中止！

5月、6月の第2組聞法会は大阪でのコロナ感染拡大による緊急事態宣言により、中止になりました。

第2組教化委員会開催

4月12日(月) 午後5時から光照寺(墨林組長)で第2組教化委員会が開催され、リモート参加も含めて14名が参加。仏事の対応について協議し、以下について、組会で確認する。

①聞法会は、開催を予定していたが、感染状況拡大による緊急事態宣言の発令も判断して中止する場合も。

後日の組内会により、**4/21と、5/26、6/12の第2組聞法会は中止した。**

②報恩講は、11月11日(木) 午後2時から即應寺で開催予定。会食はない。

講師は組長が調整する。

詳細は別途。

③門徒会とあゆみの会合同の研修会は、6月中旬以降で開催を予定しているが、コロナ感染拡大状況を判断して、5月中旬に判断することにしました。

親鸞のことば

何かを期して念仏するのではない
念仏には無義をもって義とす (歎異抄)

親鸞は「無義」を「自力のはからいのないこと」と了解しています。自力のはからいとは、自己中心的に善悪や損得を判断することです。念仏はそういうのはからいであるものではないと親鸞は語ります。親鸞は「教行信証」などで、念仏までも功德を得るための手段として利用しようとする人間のあさましさを指摘しています。

親鸞にとって念仏とは、阿弥陀さまのはたらきでした。自力で称えるのではなく、声となって自身の口からはたらき出る阿弥陀さまだったのです。そしてその声を聞き、仏道を歩んだのです。ある先生は念仏について次のように言いました。「念仏は請求書ではなく領収書である」健康にしてください、合格させてください、どうかお助けくださいなどと、阿弥陀さまに請求するのが念仏ではなく、たしかに阿弥陀さまのはたらきを頂戴しましたというのが念仏であると語ります。ですから阿弥陀さまのはたらきも念仏、頂戴しましたというのも念仏なのです。前者を「大行」、後者を「報恩の念仏」(救われたことへの感謝の念仏)と言います。

(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」リベラル社刊)

親鸞聖人に遇う

コロナ下の中を、一昨年来、久しぶりに真宗本廟を訪ねた。コロナで延ばしていた娘会都の本山収骨に、娘婿と孫で参拝。父母の納骨の時とは違い、御影堂で仏事をする。

長い間お会いできなかった親鸞聖人に、娘が遇わせてくれたことになる。ご一緒したのは全国から7組。コロナ下で駆け足の収骨だったが、娘婿も孫も、真宗本廟の荘厳と偉大さに感激し、緊張しつつも収骨を無事終えた。(本)

紙上法話

大無量寿経の仏道③
延塚知道先生

しかも、舍利弗というのは、仏弟子の中でいちばん勝れた人だから最後まで残って、お願いだから聞かせて

くださいと言って頼んだんです。

ところが、この「大経」というのは、それと反対、阿難という出来の良くない仏弟子が、お釈迦さまと出会って、その出会いから始まる。

感動の出会い

仏教というのは出会いでしょう。教えの言葉に出会ったり、それから教えに生きてる人に出会ったりそこで仏教が本当に生きてあるってことを、初めて知ることができる。本当に仏教に生きてる人を見て、何かその人を通して、阿弥陀の世界が知らされるんやと思うな。そして初めて、仏教はあるんやと知らされる。出会いから始まるんです。

だから「大経」もお釈迦さまと阿難の出会いから始まる。

そういう「法華経」は修行して、悟りを開いた人たち。ところが「大経」は、修行して悟り開かれんけど出会いから始まるような仏教。これやったら、私たちも多少分かる。

僕は自分の先生に出会ったという大きな感動の中で、仏教を学ぶようになった、育てられた。皆さんもきっとそうやと思うよ。そうでしょう、じいちゃんやら、ばあちゃんやら、父ちゃんやら、母ちゃんやら、みんな念仏者として生きていった人たちの間で育てられたんだから。

そもそも、人に頭を下げたことの無いような者が、



仏さまに頭を下げる。仏さまが、どっかに

るわけでもない。

そんなもの、頭下げるようになるには、よっぽど育てられないと、ならんわ。生まれたままほっといたら、仏さまなんてわかるはずないんや。阿弥陀さんのことかて、誰かから教えて教えてもらとるんや。

育てられんと、絶対お釈迦さまに頭下げる



ような人間には育たん。絶対そうやって、皆さんは出会いの中で育てられてきているはずです。それやったら、悟りを開かなくても、仏教に会うことができる。そういう仏教を説いているのが「大無量寿経」の仏教です。「法華経」の方は、超エリートに説いた経典。「大無量寿経」の方は、あんまり出来の良くない者に説いた経典。親鸞聖人は「大無量寿経」の方を大事にされたんや。そういう特徴があるんです。

「大経」でも、阿難に説いた「観経」では、韋提希に説いた。自分の息子がお父さんを殺して、現代に起こっているような事件や。人を殺したり傷つけたり、そんな事件が起こると、ちゃんと経典に書いてある。



固有名詞は出してないけどね。あんなことになるよって、お釈迦さまはちゃんと言っておられる。

そんな事件の中でワァッとなつて、どうしていいか分からない。そんな韋提希に説いている。だから、韋提希も出来が良くない。「観経」の中で、善導大師はこう言われます。「実業の凡夫」

私たちと同じように今まで生きてきた経験とか、今まで生きてきた環境とか、そういうものを自分自身だといつも主張していた。そしていつも人とけんかしてばかり。

それが、大人になってい

第48回近畿連区研修会中止

先に案内の第48回近畿連区研修会は、コロナ感染拡大のため、開催中止となりました



くと事件になる。いつでも、自分の今まで生まれ育ってきた環境というものに、執着している。そうやないですか。

九州と富山

僕は九州の出身なんです。それで僕の奥さんは、富山の出身なんです。富山と九州は、やっぱり違うわ。九州は、いつもこう明るくて飛び跳ねとるねん。だけど、うちの奥さんは、ドカッとしとる。

それに食べもんが違う、食べもんが。ほんとに、違う。僕はかぶら寿司が、あんまり好きやないんや。麴で漬けたりするもんは、九州にはないんです。暑いし、腐るから。そやから、そんなんは九州にはないんです。

北陸の方は寒い所で麴に寝かして、ずっと味を出してね。僕は小さいときから食べたことないから、あんまり好きじゃない。そやけどうちの奥さんあれさえあつたらご飯食べられる。それで、何でそんなん好きなんだって言って、しまいに喧嘩になる。そらしょうがないんや。生まれた環境が違うんやから、何でそんなんが好きや、うまいんやって、言い合い。

それで反対に、僕が好きなものがある。「何で、お父さんそんなんが好きなん？こんな私ら食べへんわ」そんなんがいっぱいある。それぐらい楽しい話したけど、いつまでも言い合いしとつたら、けんかになるよ。そんなことばかりやとるわ。私らは。

夫婦喧嘩っていうのは、お互いが生きてきた業を、それをどちらも正しいと思つとるんやな。それでぶつかる。

そうやっていつも喧嘩する。

そういう人間に説いたのが「観経」(つづく)